（様式２）

令和５年度　学校経営報告（学校評価報告書）

四條畷市立田原小学校
校　長　　上井　大介

１　学校経営方針

〇令和４年１月に策定の**「四條畷市教育振興基本計画」の基本理念は「みんなの学びが叶うまち　～生涯学び　夢　挑戦　～」**とされており、「予測不可能な時代を豊かに生き、未来を拓く人材を育成するには、子どもからおとなまで、すべての人々が個性や創造性を発揮し、夢や可能性に挑戦しながら、協働し、学び続けることができる環境づくりが必要」と示されている。この基本理念の実現に向けて、学校においては、今を生きる子どもたちの未来を見据え、**「学び方を学ばせる」、「学ぶ力や学ぶ意欲、学ぶ楽しさを体感させ、身に付けさせる」**ことがミッションであると考えている。

〇そのことを背景に、学校教育目標は昨年度と同じく、**「自主的につながり、表現し、主体的に取り組むことのできる子ども」**の育成とする。授業等の学校教育活動のなか、あらゆる場面において、子どもたちが自ら仲間や関係する大人たちとつながり、その過程のなかで自らが表現したり、主体的に取り組んだりする姿をめざす。

〇今年度より本校では、**家庭学習のあり方の改革を行い、「自分の課題を知り、自ら計画を立て学習を進める力」**を高める取組みを、発達段階を考慮しながら全学年で展開していく。従来であれば、学校から出された宿題を家庭学習として進めていたが、少しずつ自分で課題を発見し、その課題を解決するために計画を立て、学習を進める力を育み、自ら学ぶ家庭学習に移行していく。そして、「学習力」（自分で自分の学びを進める力）を伸ばしていくことをめざす。そして、この流れを授業や学級活動等においても展開できるよう研究を深めていく。

〇令和５年度の学校の活動テーマは**「つながり」**を継続する。子ども同士はもとより、教職員間、教職員と保護者、学校と地域など様々な関係において「つながり」を意識した取組みを推進していく。

〇活動テーマの実現に向けたキーワードとして、**「あいさつ」、「共感と安心感」、「感謝」、「チャレンジ」、「家庭・地域とのつながり」**の５つを継続して掲げる。校内教育実践の取組みのなか、具体的に５つのキーワードを常に意識した取組みを進めていく。児童には適宜、「あいさつができる子」「やさしい子」「チャレンジする子」を意識させる仕掛けを行う。

〇昨年度同様に学校スローガンを**「認め合い、支え合い、助け合い」**を掲げるとともに、今年度も**合言葉として、「ありがとう」と「大丈夫」**を掲げたい。人は一人で生きてはいけない。周囲の人に支えられ、励まされ、時に迷惑をかけながら生活する。そのうえで、他者との関わりやつながりは不可欠なものであるが、まずは自己肯定感などを育むべく、子どもたちや教職員自身が安心感や自信が持てる環境・雰囲気につなげるために、「ありがとう」や「大丈夫」が溢れる学校作りに努めたい。

〇今年度の新たな取組みとして、加配教員等を活用した取組みを展開し、**「児童の自己肯定感、自己有用感の向上」**を挙げる。校長に着任して２年間、教職員や保護者、地域の関わりの成果で子どもたちの安心感は高まってきていると感じている。その一方で、内面が不安定で、居場所や安心感が持てない児童が存在するのも事実であり、本校児童の**「心理的安全性」**を高めてまいりたいと考えている。

以上、自身も他者もともに成長できる学校を創造するとともに、そのような子どもたちの育成に関わる教職員、保護者、地域方々にも、これら方針のもと、取り組める仕掛けづくりを進めていく。

（様式２）

２　めざす学校像、子ども像、教師像（中期目標）	
★めざす学校像	みんなが笑顔で、温かく、思いやりにあふれた学校
★めざす子ども像	①自分の思いを表現できる子 ②たくさんの仲間と関わろうとする子 ③何事にもチャレンジできる子
★めざす教師像	熟成された人権感覚を持ち、認め合い、支え合い、助け合いながら教育実践を行い、常に学び続ける教師

３　学校の現状（よさと課題）

（１）子どもたちの実態

あいさつがしっかりできるなど素直な子どもが多く、やるべきことはしっかりと取り組める。また、昨年度末の反省では、子どもたちに少しずつチャレンジする意識が出てくるなど、学校や家庭、地域での取組みの成果が徐々にみられるようになってきた。その一方で、子どもが安心しきれていなかったり、自信のなさが見受けられたり、関係のある大人や友だちとはあいさつや関わりが持てるが、自ら積極的に表現したり関わろうとしたりすることについては、依然として課題が見られる。

（２）子どもたちを取り巻く環境

①教育環境

１小１中の校区であり、小中学校の連携した取組みは進めやすいが、子どもたちの集団や関係性は膠着しやすく変化が乏しくなってしまう恐れがある。

②地域

学校教育及び子どもの教育全般に概ね協力的であり、子どもに対する働きかけも積極的である。また、教育や学校、子どもの成長に対する期待が大きく、そのことにより、子どもたちが受身になってしまうようにも感じる。

③組織（教職員、PTA、保護者）

教職員はまじめで子どもや保護者に対して、寄り添い、熱心に取り組める。一方で、やや形にとらわれたり、ルールで縛りがちになってしまったりする傾向が見られる。

また、ＰＴＡは学校運営や学校行事等に関し、理解を示していただいており、常に役員会等において、情報共有しながら、進めることができる素地がある。

４　今年度の達成目標、具体的な方策

目標設定区分１　『学校経営』

Ａ　今年度の成果目標	達成基準（各種調査、アンケート等）
教育課程の編成やカリキュラム・マネジメントの実現等を主眼に置いた学習指導要領の確実な実施に向け、「確かな学び」の定着を図るとともに「生きる力」を育む指導を行う。 ①子どもの安心・安全の確保を最優先に	①学校教育自己診断等　児童保護者教職員アンケート Ａ（児）「あいさつすることや相手を思いやることをがんばっている」（R4/83%） Ｂ（保）「学校は、子どもの人権を尊重した指導を行っている」（R4/87%） Ｃ（児）「先生は、いじめは絶対にいけないと教えてくれている

（様式２）

置いた学校運営に努める。人権意識を高め、あいさつなど他者との関わりを通して「つながり」を意識し、より一層の「自己肯定感や自己有用感の醸成」を図る。 ②今年度は研究教科を算数とした。これまで国語科の研究で深めた手法を活用しながら算数科での研究を進め、発表や交流、意見交換等を行う場での高まりを意識する。また、自らが自分の課題を知り、そこを解決する力の育成や、カリキュラム・マネジメントの成果として、教科横断型の問題にも対応できる力の育成を進めたい。 ③タブレットＰＣを活用した授業を推進し、取組み実践の共有やミニ研修等、教員のスキルアップを図り、授業改善をめざす。 ④課題のある理科については底上げを図りたい。昨年度同様、まずは自然現象や科学事象に興味や疑問を持たせ、実験や観察等、検証を経て解決する過程の楽しさを体感させることから課題改善を図る。 ⑤「体力づくりアクションプラン」に基づき、児童の体力向上に資する取組みを充実させるとともに、自分のみならず家族や他者の命や健康を大切にする意識を育む。	と思う」(R4/86%) Ｄ（教）「いじめについて情報収集や対応及び未然防止など適切に取り組んでいる」(R4/100%) Ｅ（児）「自分が苦手なことやできないことにもチャレンジするようにがんばっている（R4/77%） Ｆ(全国学調児)「自分にはよいところがあると思う」(R4/76%) Ｇ(全国学調児)「人の役に立つ人間になりたいと思う」（R4/98%） Ｈ(全国学調児)「将来の夢や目標を持っている」(R4/83%) ②学校教育自己診断等　児童保護者教職員アンケート Ａ（保）「先生はわかりやすい授業をしている」(R4/90%) Ｂ（児）「算数の授業はわかりやすいですか」(新設) Ｃ（児）「自分の発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう工夫していた」(R4/69%) Ｄ（児）「話し合う活動では、相手の考えを最後まで聞き、自分の考えをしっかりと伝えていたか」(R4/80%) Ｅ（全国学調児、他）「自分で計画を立てて勉強をしていますか」(R4/63%)（新設） Ｆ　すくすくウォッチ「わくわく問題」の正答率（新設） Ｇ　全国学力・学習状況調査（全国学調） Ｈ　標準学力検査（ＮＲＴ） ③学校教育自己診断等　児童保護者教職員アンケート Ａ（保）（児）（教）「タブレットＰＣ等ＩＣＴ機器を活用した授業」に関する質問（R4/保 79%、児 83%、教 86%） ④学校教育自己診断等　児童保護者教職員アンケート Ａ（児）「あなたは自然や科学のことが好きですか」(R4/88%) Ｂ（児）「理科の学習は日常の生活のなかで役立つと思いますか」(R4/93%) Ｃ（児）「理科の学習は好きですか」(R4/80%) Ｄ　標準学力検査（ＮＲＴ） ⑤学校教育自己診断等　児童保護者教職員アンケート Ａ（児）「運動するのは好きですか」(R4/82%) Ｂ　全国体力・運動能力、運動習慣等調査

Ｂ　目標実現に向けた取組み

項目	達成基準	結果	評価
①人権意識、自己肯定感、自己有用感の醸成	①A　85%以上 ①B　85%以上 ①C　90%以上 ①D　95%以上 ①E　80%以上	①A　85%○ ①B　93%○ ①C　87%△ ①D　100%○ ①E　75%△	子どもたちのあいさつや思いやりに関すること、人権に対する保護者の捉え、教員のいじめに関する取組み、児童の自己肯定感の一部項目で達成できたものの、全体としては達成には至らなかった。

（様式２）

	①F　80%以上 ①G　90%以上 ①H　90%以上 ※肯定回答	①F　71%△ ①G　94%○ ①H　81%△	今年度も児童から見た教師のいじめに係る指導のあり方や、児童のチャレンジする気持ちについて、目標には至らなかった。子どもたちの思いや気持ちに寄り添った形に乖離があるとも考えられる。今後も研究を重ねて取り組んでいきたい。教職員には引き続き、校長通信を発行し、人権意識、指導力の向上、今日的な課題等の共有を図り、意識向上につなげる。
②算数科を中心にした校内研究、自学自習力の向上	②A　85%以上 ②B　85%以上 ②C　75%以上 ②D　80%以上 ②E　70%以上 ②F　府平均１ ②G　全国平均1 ②H　全国平均50 ※肯定回答	②A　92%○ ②B　83%△ ②C　65%△ ②D　82%○ ②E　65%△ ②F　0.932△ ②G　0.928△ ②H　47.4△	達成には至っていない。 今年度も一部平均値を上回る箇所も見られるが、全国学調、標準学力検査（ＮＲＴ）ともに下回る結果となった。 今年度は算数科を研究教科として、校内研修を各学期１回ずつ計３回実施した。それぞれの研究授業や研修では算数の授業について深めることができた。また、「自ら計画を立て学習を進める力」の育成に向けて年４回の研修を行い、各学年に応じた内容を取り組んできた成果があり、少しずつ子どもたちの意識は向上しているもののＥの項目の達成には至らなかった。
③タブレットＰＣ等ＩＣＴ機器を活用した授業実践の推進	③A保 80%以上 児 85%以上 教 90%以上 ※肯定回答	③A 保 75%△ 児 80%△ 教 84%△	達成には至らなかった。 タブレットＰＣを活用した授業や取組みはさらに進んできたと認識しているが、アンケート結果は目標値に到達しなかった。教員のタブレットＰＣ活用スキルは確実に上がっており、市教委が進めるＳＡＭＲモデルの段階を意識しながら、引き続き、取組みを進める。今後はより一層タブレットＰＣの効率性や有効性を教職員も子どもも感じるような取組みを実践したい。
④理科教育の充実	④A　85%以上 ④B　90%以上 ④C　85%以上 ④D　全国平均－１ポイント ※肯定回答	④A　89%○ ④B　91%○ ④C　87%○ ④D　46.1△	概ね達成している。 標準学力検査（ＮＲＴ）の結果は達成に至らなかったが、子どもたちの自然や科学、理科への興味関心は高まったと考える。４～６年生では理科を学年内の交換授業で実施しており、担当教員の熱心な指導や実験観察といった体験をしっかりと積ませていることの賜物と考える。また、今年度の集会の校長講話でも科学的要素を取り入れた内容を伝えるよう工夫した。
⑤体力向上等健康教育の	⑤A　80%以上	⑤A　87%○	達成している。

（様式２）

推進	⑤B　全国平均－１ポイント ※肯定回答	⑤B 男 51.0○ 女 45.1△	今年度はスポーツテスト前の講習会や体育での練習などを組織的に取り組んだことが結果につながったと考える。また、測定時も担当教員の声かけやモチベーションを高める工夫などが多く見られ、それらも要因のひとつと考える。男子の結果は全国を上回る一方で女子は芳しくなく、学校の体育の授業の他、習い事でのスポーツ経験など放課後の過ごし方も大きく関わっているように感じる。今後も校内の体育的行事や日頃の体育授業の充実、休み時間の有効活用など子どもたちの運動への興味付けを仕掛けていきたい。

目標設定区分２　『学校組織の運営』

Ａ　今年度の成果目標	**達成基準（各種調査、アンケート等）**
教職員一人ひとりが明確なミッションのもと、やりがいと創造力をもって担当に当たれるよう適材適所を意識した学校組織体制を構築とともに、質の高い学校運営をめざす。 ①管理職、教務主任、各部長、（学年主任）等による学校運営委員会を効率的に開催するとともに、都度学校長のビジョンを明確に示しつつ、円滑な学校運営の推進を図る。 ②教職員間で「認め合い、支え合い、助け合い」の意識のもと、組織を超えたサポート体制がとれるよう意識醸成を図り、温かく風通しの良い職場環境をめざす。 ③支援教育の視点を取り入れた授業づくり、コミュニケーションの構築等、取組みの推進を図る。相手が大人でも子どもでもまずは安心できる言葉かけやフォローに努めながら、必要な指導を行う意識を確立させたい。	①学校教育自己診断等　教職員アンケート Ａ　「学校長の示すビジョンが明確であるか」（R4/100%） Ｂ　「学校全体の学力傾向や課題について、全教職員の間で共有していますか」（R4/100%） Ｃ　「学校運営の状況や課題を全教職の間で共有し、学校として組織的に取り組んでいるか」（R4/100%） ②学校教育自己診断等　教職員アンケート Ａ　「学校は楽しい」（R4/93%） Ｂ　「認め合い、支え合い、助け合う温かい職場環境の雰囲気がありますか」（R4/100%） ③学校教育自己診断等　教職員アンケート Ａ（教）「特別支援教育について理解し、授業の中で、児童の特性に応じた指導上の工夫を行いましたか」（R4/100%） Ｂ（児）「先生はあなたの良いところを認めてくれると思いますか」（R4/83%）

Ｂ　目標実現に向けた取組み

項目	達成基準	結果	評価
①学校長のビジョンを踏	①Ａ　80%以上	①Ａ　74%△	達成には至らなかった。

（様式２）

まえた円滑な学校運営の推進	①B　80%以上 ①C　80%以上 ※最肯定回答	（肯定 95%） ①B　63%△ （肯定 100%） ①C　42%△ （肯定 100%）	校長のビジョンは、教職員アンケート結果から「明確である」の肯定回答は今年度も高い位置で推移したが、目標値を最肯定値に設定したこともあり、達成には至らなかった。 また、「学校全体の学力傾向や課題」や「学校運営の状況や課題」の共有や組織的な動きについては、学校運営の肝であり、より校長の明確なビジョンを示しつつ、教職員とともに深めていきたい。
②認め合い、支え合い、助け合う温かい職場環境づくり	②A　90%以上 ②B　80%以上 ※Aは肯定回答 ※Bは最肯定回答	②A　100%○ ②B　58%△ （肯定 100%）	概ね達成している。 Bについては最肯定値を目標としたこともあり、達成には至らなかったが、肯定評価から判断して概ね達成したと考える。何より、教職員アンケートで「学校は安心して過ごせる楽しい場所である」の肯定回答１００%は嬉しい結果である。 今年度も教職員の「管理職や同僚からの支援」についても、高い評価が得られた。他のアンケート結果からも同様の結果が見られ、温かい雰囲気で学校運営ができていると考えている。学校運営にあたっては今後も教職員が子どもたちの前で高いパフォーマンスが発揮できるよう教職員の安心感の向上に努めていきたい。
③支援教育の視点を取り入れた取組み及び関わりの推進	③A　80%以上 ③B　90%以上 ※Aは最肯定回答 ※Bは肯定回答	③A　37%△ （肯定 100%） ③B　78%△	達成には至らなかった。 近年、子どもたちの実態を踏まえると柔軟な対応を求められることが増えている。その対応の実現に支援教育の視点は不可欠と考える。肯定回答は１００%だったが、教職員が自信をもって取り組んでいると回答できるようさらに意識向上に努めたい。 また、B の項目「先生はあなたの良いところを認めてくれると思いますか」のポイントが達成できなかったことは残念である。子どもたちとの意識に乖離はないかを検証し、さらに子どもたちに寄り添った指導や関わりが持て、子どもたちの信頼感を高められるよう努めたい。

目標設定区分３　『人の管理・育成』	
Ａ　今年度の成果目標	**達成基準（各種調査、アンケート等）**

（様式２）

教職員の資質向上とキャリアステージに応じた人材育成に重点を置く。 ①教職員の人権意識の醸成や資質向上を図り、児童や保護者、地域から信頼される組織化された教職員集団をめざす。 ②次期管理職候補の育成、及び学校教育活動全体の向上を図るべくミドルリーダーの育成に注力する。 ③教職員の働き方改革も踏まえ、各取組みや会議等がより効果的かつ効率的に進むよう、組織化された会議の運営を模索する。	①学校教育自己診断等　児童保護者教職員アンケート Ａ（保）「学校へ行くのを楽しみにしている」（R4/83%） Ｂ（保）「学校はお子さまのことについて、適切に相談に応じている」（R4/87%） Ｃ（児）「学校は楽しい」（R4/80%） Ｄ（児）「先生は困ったときに相談にのってくれる」（R4/80%） ②次期管理職候補、首席及び指導教諭等ミドルリーダーに位置する受験者の推薦（R 元、R2/0 人、R3/2 人、R4/1 人） ③学校教育自己診断等　教職員アンケート Ａ（教）教職員の時間外勤務実態（R4/平均 28H/月） Ｂ（教）「各会議の運営では、案件の整理などにより時間退縮もでき、効率的に実施することができた」（R4/71%）

Ｂ　目標実現に向けた取組み

項目	達成基準	結果	評価
①児童や保護者、地域から信頼される教職員	①A　85%以上 ①B　85%以上 ①C　85%以上 ①D　85%以上 ※肯定回答	①A　92%○ ①B　87%○ ①C　83%△ ①D　82%△	概ね達成している。 保護者の捉えは高まり達成できた。一方で子どもたちの受け止めは、昨年度から向上してはいるが、目標には至らなかった。より一層子どもたちにとって楽しくて安心できる魅力的な学校づくりに努めたい。 また、今年度も校内支援ルーム対応や休んだ教員の補欠対応を「同僚性」を合言葉にみんなで乗り越えた。さらに保護者の安心信頼につながるよう、マチコミアプリのタイムラインを活用して学校行事や児童の様子などを発信した。
②次期管理職候補及びミドルリーダーの推薦	管理職選考及び三部会部長任務等ミドルリーダーの育成１人以上	部長職を通してミドルリーダーの育成を図った。	達成できたと考えている。 部会部長等対象の運営会議を開催し、学校運営に関する視点から意識啓発を図ることができた。次年度はより一層ミドルリーダーの育成に向けた取組みを推進したい。
③教職員の働き方改革	③A　25H/月以内 ③B　70%以上 ※肯定回答	③A　24.5H/月○ ③B　89%○	達成している。 本校教職員の時間外勤務の実績は、概ね良好である。一方で管理職を含めた教職員が補欠や後任担任として指導に当たる対応が多くあり、教職員には負担がかかったところもある。 会議運営については、事前に調整が図られていたため延長することなく効率的に終えることができた。その一方、もっと本音で意見が言える会議の雰囲気を求める教職員の声もあった。

（様式２）

目標設定区分４　『地域連携と渉外』	
Ａ　今年度の成果目標	**達成基準（各種調査、アンケート等）**
こ小中連携・一貫教育を基軸とし、地域コミュニティづくりの推進を図る。 ①学校運営協議会制度（コミュニティ・スクール）の研究及び周知の充実を図り、本制度が主体となった取組みを１点展開 ②田原地区のこ小中連携・一貫教育の取組みのより一層の充実を図るとともに、ＰＴＡ活動や田原地区教育推進協議会と連携した取組みを通して、家庭教育支援の充実に努める。 ③創立１５０周年記念事業の取組みを実施	①田原中学校と連携し、学校運営協議会制度（コミュニティ・スクール）について、学校だよりや各会議において、保護者や地域への発信を行い、学校運営協議会の円滑な運営を図る。 ②学校自己診断等　児童保護者教職員アンケート Ａ（保）（児）（教）「中学校や地域、ＰＴＡとの連携」に関する質問（R4/保 87%、児 87%、教 92%） ③学校のみならず、実行委員会やＰＴＡ等の団体と連携し、円滑な事業を展開。事後のアンケートを実施（新設）

Ｂ　目標実現に向けた取組み

項目	達成基準	結果	評価
①学校運営協議会制度（ｺﾐｭﾆﾃｨ･ｽｸｰﾙ）の導入	学校だより発行３回以上	学校だより発行１回	達成できなかった。 今年度は学校だよりでの紹介は１５０周年事業の活動もあり、１回に留まった。そのなか、タイムライン機能を活用して、各取組みを保護者に発信することで、深められたと考える。
②田原地区のこ小中連携・一貫教育の取組みの充実	②A保 80%以上 児 80%以上 教 90%以上 ※肯定回答	②A 保 90%〇 児 90%〇 教 95%〇	達成できた。 コロナ禍が明け、学校行事や地域行事が実施可能となり、児童や保護者の意識も戻ってきた。こ小中の取組みでは設定した「めざす子ども像」に基づいた取組みを進め、年２回の合同研修会により一層の推進が図られた。保護者にはタイムライン機能を活用した発信を行うことで啓発できた。
③１５０周年記念事業実行委員会を中心とした事業の展開	③事業後のアンケートで肯定回答 80%以上	③実施なし	アンケートが実施できなかった。 教職員、児童、保護者、地域関係者からは一連の取組みについて、記念品等の作成や５月の児童会主催行事、１１月の式典の内容や様子等について、とりわけ子どもたちの取組みや頑張りに対して、多くの方から肯定的な意見があり、高い評価をいただいた。

（様式２）

５　総合評価と次年度に向けて

アンケート等の結果から改善された項目はあるものの、総合的な実績として達成できたとは言えない一年となったが、創立１５０周年記念の年であり、児童、教職員、ＰＴＡなど保護者・地域はこのことをモチベーションにして学校をあげて様々な活動や取組みに挑戦できた一年だったと思う。

また、大きな取組みの柱として挙げていた「自分の課題を知り、自ら計画を立て学習を進める力」と「児童の自己肯定感、自己有用感の向上」については、まだ明確な成果は出てはいないが、研修などを重ねながら動き出している。今後も学年や担当教員との共有を図りながら継続して取り組んでいきたい。

加えて、学校からの情報発信として学校だよりやマチコミメール等のツールに加えて、タイムライン機能を活用して情報発信を行ってきた。アンケートでは把握できていないが保護者の声からは概ね良好と受け止めている。

その他アンケート結果からも分析できるとおり、教職員や保護者と子どもたちの意識に若干の乖離があることがわかった。大人は取組みや活動を肯定的に捉えていても、子どもたちはそうでなかったり、各々の活動や取組みがアンケートで問われている内容と合致しなかったりするところもあるように感じた。

このようなことから、教職員や保護者は子どもたちの活動やできた結果や成果に対して、コミュニケーションを取り、しっかりと“価値づけ”を行う必要があると考える。「〇〇ができるようになってすごいね」、「これをがんばったから、きっとこんな力がついたよ」など活動や取組みを行った振り返りも重要となる。また、活動や取組み、学習を行った最後には「どんな力がつくのか」、「何ができるようになるのか」というゴールを明確にして見通しを持たせることも子どもたちにとっては必要である。そして、付いた力を経験した内容だけに止まらず、日々の生活のあらゆる場面で活用できる汎用性や意欲などの力に繋げたいと考える。

また、今年度も児童の安心安全や常に児童の気持ちに寄り添う対応を意識してきたが、この点については、昨年度以上に教職員の意識のさらなる高まりを感じている。児童が教室や学校のなかに安心できる場所があり、仲間との関わりのなか、心も体も安心した状態で学習やコミュニケーションがとれる環境づくりに努めてきたが、その点も一層改善されてきていると感じている。この点は今後も向上させたい。

一方で、詳細を分析する中で、依然として家庭学習の在り方や学習の定着等においての課題が見受けられる。この点については、さらに自学自習力の育成、自ら計画を立てて学習する習慣付けなどの取組みを進めたい。また、タブレットＰＣの活用についても常に新しい活用方法や好事例を共有し、研鑽を積んでいきたいと考える。

今年度、数値として達成できなかった項目については、改めて実態を教職員で共有のうえ検証を行い、次年度に繋げたいと考えている。